避難住民同士の絆を深めた「ふれあいの赤いエプロンプロジェクト」福島県双葉町の事例

P08-12

安部恭子[1] 黒田藍[2,3] 木下ゆり[3,4] 久地井寿哉[3] 佐藤香菜子[3,5]
石井なつみ[3,6] 伊東尚美[3,7] 福田吉治[2,3]

1 福島県双葉町健康福祉課 2 帝京大学大学院公衆衛生学研究科
3 ふれあいの赤いエプロンプロジェクト評価チーム 4 東北生活文化大学短期大学部
5 中京学院大学短期大学部 6 医療法人かしの木内科クリニック 7 福島県立医科大学医学部

日本公衆衛生学会COI開示 ： 演題発表に関連し、開示すべきCOI関係にある企業等は下記のとおり。
受託研究：公益財団法人味の素ファンデーション

背 景

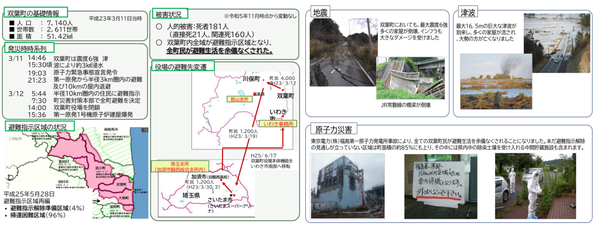
(1)双葉町の位置と震災前の状況について

資料提供：双葉町

双葉町は、福島県の東部に位置する。環境省の「快水浴場百選」にも選ばれた双葉海水浴場や丹精込めて育てられたバラ650種類1万本が咲きそろう双葉バラ園など、数多くの魅力を有していた。

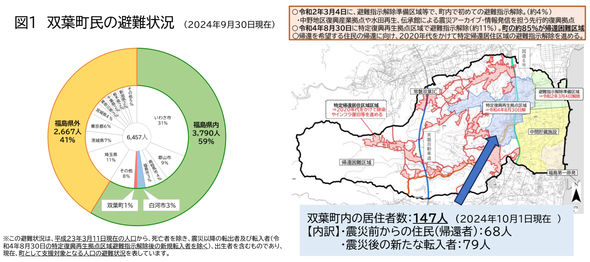
(2)双葉町における東日本大震災の概要と被災状況

地震・津波・原発事故が重なった世界にも類を見ない「複合災害」



(3)双葉町の避難と避難指示の状況

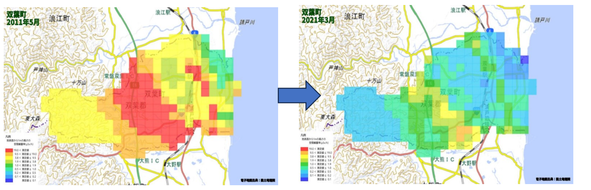
図1 双葉町民の避難状況 （2024年9月30日現在）



※この避難状況は、平成23年3月11日現在の人口から、死亡者を除き、震災以降の転出者及び転入者（令和4年8月30日の特定復興再生拠点区域避難指示解除後の転出入者を除く）、出生者を含むものであり、現在、町として支援対象となる人口の避難状況を表しています。

双葉町内の居住者数：147人 （2024年10月1日現在 ）
【内訳】・震災前からの住民（帰還者）：68人
・震災後の新たな転入者：79人

(4)双葉町における空間線量率の経時変化マップ



引用:福島県環境創造センター https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/298/keijihenka-futaba.html

(5)被災後の地域課題と対応

長期化する避難生活 ➡ 【課題】
・住民の孤立
・高齢者の健康・食生活の問題
・コミュニティの再構築必要性

被災により、課題解決に必要な場所、人、道具、資金も限られていた・・・

これらの課題に対し、味の素グループ・公益財団法人味の素ファンデーション(TAF)と連携し、被災者の食生活の改善とコミュニティの再生・活性化を目的とした参加型の料理教室(ふれあいの赤いエプロンプロジェクト)を県北・県中・県南の自治会等で行った。

(6)ふれあいの赤いエプロンプロジェクトについて

公益財団法人 味の素ファンデーション(The Ajinomoto Foundation ： TAF)は、東日本大震災後、東北3県で復興応援事業 「ふれあいの赤いエプロンプロジェクト」を実施。

事業目的	①被災者の食生活と栄養状態の改善 ②災害で破壊された地域コミュニティの再生・活性化への貢献を通じた復興応援
事業内容	各地域のパートナー団体(行政、社会福祉協議会、自治会等)と連携した取組 アウトリーチ型「料理教室」
テーマ	いっしょに作って、いっしょに食べよう ※料理教室の流れは、図2参照。

＜活動実績＞ 開催回数：3,771回 ／ 参加者数：延54,434名

食をテーマにした8年半にわたる被災地支援の活動として他に類のない活動。

図2 赤いエプロンプロジェクト「料理教室」の流れ

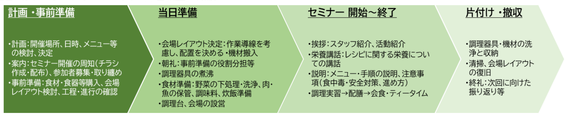
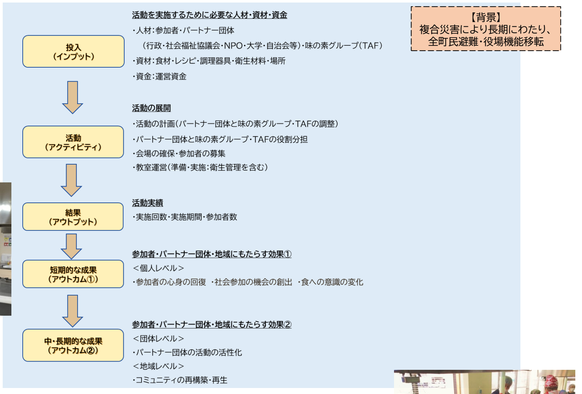


図3 赤いエプロンプロジェクトの活動概念図(ロジックモデル)



目 的

アクションリサーチの一環として、自治会の好事例を通してプロジェクトの効果を明らかにする。

方 法

TAF の活動記録(2012年4月-2020年3月)から双葉町の情報を抽出した。
継続事例の「双樹会」の活動評価のため、研究者 2 名が 2020年2月に会長にインタビューし事例をまとめた。2023年8月に役員3名に内容確認と追加の聞き取りをした。
双樹会、双葉町保健師、TAF、研究者で活動の効果等を本プロジェクトにおけるロジックモデル(図3)をもとにまとめた。

倫理的配慮

本研究の実施については、東北生活文化大学・東北生活文化大学短期大学部研究倫理委員会の承認を得た。(承認番号R4-14)

結 果

(1)対象：双葉町県南双樹会

県南地域を中心とした双葉町避難者で構成される自治会で、54 世帯が会員登録。料理教室は年4回開催した。料理教室の周知は、役員が全世帯にチラシを手渡しで配布している。料理教室以外に研修旅行、県内外避難者との交流などの活動を行っている。

(2)活動実績(アウトプット)

【活動場所】 避難先の白河市白河産業プラザ人材育成センター
【実施回数】 2014 年3月～2020年2月に、双樹会で 34 回(495 人参加)
※双葉町として、双樹会以外で 16 回(178 人参加)実施。

(3)活動の効果(アウトカム)

いっしょに作って いっしょに食べる活動

①短期的効果：個人レベルの変化

自然と多くの語らいが生まれる ➡ ・気持ちを表出する機会 →心の栄養補給の場
・栄養状態の回復

②中期的効果：団体・地域レベルの変化

参加者のつながりを強くするきっかけ ➡ 他の活動においても連携が図られ、参加者の絆が深まった

(4)自治会が活動を継続する上でのポイント

①自治会長の人柄とリーダーシップ

活動が継続できた団体とできなかった団体の違いとして、代表のリーダーシップがあった

②年間計画による定期開催

TAFの長期的な支援により、あらかじめ年間計画を立てることができ、活動継続に有効だった

③来られない人にも声をかける

活動初期は毎月チラシを作成し、自治会長と班長がチラシを配布
近隣の地域に転居した人も、継続して双樹会の活動に参加することもあった

(5)活動を支援した保健師の感じた困難感および教訓

①原発避難特有の支援の難しさ

・避難場所が広域にわたることでの課題
→避難先それぞれの自治体・地域で関係機関との調整が必要
各地域のルールも踏まえた対応の必要性
→各避難先までの移動に時間を要するため、効率的に実施をすることが困難
→避難者に公平に実施したかったが、震災前の職員人員配置・方法では対応が難しい

・新たなコミュニティ形成の必要性
→避難先で震災前のコミュニティとは異なる新たなコミュニティ形成が必要

②保健活動の難しさ

・被災により保健業務だけでなく事務手続きなど新たな業務に追われる日々
・短期的な成果の見えにくい保健活動の実施の困難感

③支援の工夫・心構え

・長期的な視点での実施計画の立案
→継続的な取組につなげる
・各自治会等でリーダーになりそうな人への声掛け
→継続の難しさと後継者の課題への対応

④プロジェクト実施による支援者側への効果

・プロジェクトの導入により、住民への声掛けや調整の機会を得られたことで、住民とのコミュニケーションと関係性の構築のきっかけとなった
→支援の糸口となった

・被災者支援において長期的な支援が必要であり、保健活動の成果が見えにくい中、いっしょに作っていっしょに食べる活動は、食べて笑顔になるなど活動の成果が見える取り組みであり、支援者側もエンパワメントされた

双葉町は特殊な状況下にあるために町民はそれぞれ一様な状況にはいない ➡ 悩みや不安もそれぞれである ➡ 同じ出来事でも、状況が違えば、受とめ方が異なる ➡ 慎重かつ個別的な対応が求められる

結 論

本プロジェクトは、避難住民同士のつながりを強め、絆を深め、コミュニティの再構築に有効であることが示唆された。現在、双葉町では、徐々に帰還が進んでいる。帰還を望む住民の多くは高齢者である。また、新規の転入者の増加、帰還区域も制限される中で、町内においても新たなコミュニティ形成が必要とされている。
本プロジェクトで得られた知見は、今後、町内で起こりうるコミュニティの課題に対しても有効であると考えられることから、経験をもとに取組んでいきたい。